

「持つ」テレビから「ある」べきテレビへ

伊藤 洋



1983年12月13日

本稿は、「テレビジョン放送開始30周年記念懸賞論文委員会」(主催), NHK・民放連・日本電子機械工業会・テレビジョン学会・NHKエンジニアリングサービス(後援), 放送文化基金(協賛)による「テレビジョン放送開始30周年記念懸賞論文」入選作である。

1. テレビ前史

敗戦後間もない昭和25年、私がある頃住んでいた地方の県庁所在地の城跡で、博覧会が大々的に催された。あの未曾有の大戦の後で、国民に科学的知識を普及させることが、国家事業として推進された時期でもあり、これ一つには戦争への反省がこめられていたのではなかったかと思われる。その博覧会の出展物のほとんど全ては、アメリカの市民生活品ばかりであったように記憶している。この山間の傾斜地で、どうして使うことができるのかと不思議に思われるような、大型のトラクターやコンバインなどに混って、電気冷蔵庫、電気洗濯機、電気掃除器、電気ジューサー等々、今日では全て「電気」という接頭語を取り除いて通称されるものばかりが展示されていた。これらの品々は教科書の中で、あるいは見たことがあるかどうかといった程度の物珍しいものばかりで、これらを目のあたりに見た感激は、今でいえば、有名なテレビタレントの実物を「ショー」の舞台に見るときの、あの心の高まりに似たものであった。そんな数々の新奇な文物に混って、会場の一段と高い二の丸跡付近には

臨時の小屋がけの暗室がしつらえられており、その中に、テレビジョン受像機がたった一台展示されていた。そしてその受像機には日に何回か時間を決めて、そこから数十メートル離れた大手門跡の広場に特設された、けばけばしい舞台の上で演じられている、博覧会のアトラクションが映し出されていたのである。

地元ではことの外有名であった、素人のど自慢の地方大会優勝者が、森の水車がまわります。……コトコトコットン コトコトコットン……」と唄っていたのが、受像機に鮮かに写し出されていたことを、今この原稿用紙に直面しながら、つい昨日のことにように思い出している。今にして思えば、このRCA社製の丸型白黒ブラウン管の映像は白黒の硬い画質の、しかも、一時代前の電送写真にみるような、雑音の多い画面で、その技術レベルはいたって幼稚なものであったといつてよい。しかし、その時受けた印象の強烈さは、どうしても筆舌には尽し難い。この日、一日このテレビジョン実演の全てを、くゞいるように何度も観た。受像機の置かれた小屋と、撮像している演芸会場でのカメラとをみるために、二つの会場を結ぶ城のすり減った石段を上ったり、降りたりしながら何度行き来したことであったろう。今ふり返って、このような心ときめく未知への出会いは、この博覧会のテレビジョン以上のものとしては何一つ知らない。この衝撃的な体験こそ、今私が技術にかかわって、人生を投入しているイニシエーションを与えられたものに他ならない。まことに人の職業の選択は面白い。

空想科学？漫画のテクニカル タームであった「テレビジョン」との劇的な対面の後、数年を経て私達の田舎にも、「テレビ」を購入する者が現われた。当時東京の下町で工場を営んでいた息子が、なんでも一儲けしたとかで、その儲けをはたいて田舎の老父母に贈呈したものだと言われていた。私達腕白共は毎晩のようにそのテレビのある、村でたった一軒の家を訪れ、どの番組というのではなく、写っているものならなんでも、好奇心にかられて観察した。老夫婦がもう寝るのでスイッチを切る、と言うとしがし、その大きな農家の土間から立ちのいたものだ。とかくする中、この孝子談は近郷近在に知れわたり、観客は日増しに増していったが、孝行息子や孝行娘も増加して、やがて村のあちこちに、八木・宇田アンテナがちらほら立ち始めるようになった。こうして、無頼の観客であった私達腕白小僧達は、あちらの富家、こちらの財産家と連日、その日の気分を選択しながら、テレビ観察訪問を続けていった。しかし昭和30年代になると、テレビ受像機を設置する家庭の中に、「一般」の人達がチラホラ含まれるようになって、村の人々の間に静かな動揺が起り始めた。

「あの家で入れたんじゃ、うちでも入れんとみっともねえ」といった強迫観念は、やがて村内の津々浦々に波及して、町の電気屋は古くからの屋号を、「テレビ」と改め、黄色い小型トラックに受像機を積んで、白い土埃をまき上げな

がら配達にかけずりまわるようになり、夜毎のテレビ観察訪問の習慣はいつしか子供達の世界から消滅していった。

2. 「持つこと」のテレビ

昭和 35 年ごろまでに、テレビは私達の村のほとんどの家に設置されるようになった。民間放送局もテレビ放送を開始して、それまで不要だったチャンネルつまみも使用されるようになった。屋根の上の八木・宇田アンテナは放送波を受信するばかりでなく「当家ではテレビを持っております。」という無言の主張を送信する機能をも受け持っていた。このように当時の著しいテレビ受像機の普及の要因には、村社会のもつ「集団依存主義」が一つの背景にあったことは否めない。つまり、村的社会の中では人々は隣家と同じ行動を取ることで、集団に帰属し、集団から受け入れられたいとする強迫観念が存在する。村の古い家並みをみると、当時の所得や階層に合わせて、ほとんど同じ形の外装と間取りの家々が立ち並んでいるのであって、その中に新たにテレビの受像機やアンテナがおかれたときにも、同様に標準的インテリア、エクステリアとして各家々に導入されていったのである。このような傾向は、ひとり農村社会に止まるものではなく、我国では都会にあってもこの時代深層では同一の心理的行動が取られていたと言えよう。

昭和 30 年代中頃に入ると、普及をつづけたテレビは、人気番組、人気タレントを生み、コマーシャルによる人気商品を登場させ、人口に膾炙した流行語を生み出していった。人々はテレビから与えられるこうした新時代の風潮を次々と取り込み、新知識を肥大化させ、人気商品を競って購入していき一方、これらの新知識・新商品はまた、人々の間を連結するコミュニケーションの主題となり、それらを持たない人はテレビ社会への参加権を失なうのではないかといった強迫感をも持つようになった。その強迫感は更にテレビ普及のはずみを助長することになって、テレビは昭和 30 年代早々にして「テレビ爆発」といってもよい程の驚異的発達を遂げていったものである。このように、テレビ受像装置、テレビによって作られるありとあらゆる知識、流行、新しい消費材、これらを総称して「テレビ文明」は、総じてテレビを「持つ」ものの「特たざる」ものへの強迫を伴いながら、その普及を動機づけていったものであろう。このことは、昭和 40 年代前半の、カラー化の過程においても本質的には、全く同一のモチベーションを与えつづけていった。こうして、実に私が初めて、博覧会で白黒テレビに劇的に対面してより、10 余年をしてカラーテレビが全国津々浦々に普及していったのであるが当時少年の筆者は、少年ゆえであるとしても、世の何人がこれだけの事実を予測し得たであらう。

このようにして、我国のテレビ社会は驚くべき発達をつづけた。それは、政治、経済、文化教育、風俗、習慣、価値観……とうてい数え切れない諸々の事象に多大な影響を与えずにはおかなかった。昭和30年代の高度成長期の経済規模の拡張は、産業自体によってのみ成ったのではなく、裏方としてこのテレビというメディアの介在による大きな寄与があったに違いない。この間、人々は物を「持つ」欲望を肥大化させ、それは大量生産・大量消費のシステムを作り出し、その連鎖の中にテレビは積極的役割を分担しつつ、自らも成長を成し遂げていったのである。まことに、テレビは、現代の「持つ」様式の社会をつき動かす、巨大な文明装置であると言える。しかし、二度にわたる石油危機は、このような「様式」の社会を大きく変革させようとしている。そして今日、テレビ放送開始30年を迎え、「持つ」スタイルのテレビはその大きな役割を消化して、新たなジェネレーションに突入しようとしている。コンピュータ、光ファイバ、ニューメディア、デジタル通信……等々、テレビをめぐる技術革新は無数にある。これらの先端的技術を取り込みながら、明日のテレビは新たな創造を目指して進むことだろう。それをつき動かしていくものは、過去の基本的パラダイム「持つ」テレビではなく、「ある」べきテレビでなければならない。

3. 「ある」べきテレビ

E. フロムは「生きるということ」(原題 To have or to be?、佐藤哲郎訳、紀伊国屋書店)の中で、人間の生き方を「持つ」様式(to have)と「ある」様式(to be)とに対比して、現代の文明社会を鋭く批判している。彼によれば、現代は「持つ」文明であり、物を所有することが文明そのものの目的と化している。またここでは、繰り返し「持つ」ための商品が生みだされ、その中で人々はあくなき「幸福の充足」を期待するものの、これは拡大再生産される幻滅であり、現代の文明はこの輪廻のダイナミズムを、もっとも重要な推進力としているのだが、これは必然的に破綻すべきものだ、と語っている。フロムはまた、これは何も物質や財産といった有形のものに止まらず、知識・教養・学歴・社会的地位・愛・信念等々といった形而上学に属するものまで、現代では「持つ」様式の中にある、と言う。そして、人々が生きるということは、このような「持つ」様式によってではなく「ある」べき様式の中に充実した生を生きることではなくてはならない、と説いている。ここで永々とフロムの論点を述べる紙幅はないが、ここでの主題であるテレビ社会に限ってみても、たしかに、受像機を始めとする各種機材を「持ち」、映像や情報によって得られる知識・流行等々を、「持つ」ことを主要なあり方として、これまでの巨大なテレビ社会は成り立ってきたといえる。得ないだろうか。もしそうであれば、フロムの言うように、この「様式」は何時の日か破綻せずにはいられないことになる。

それでは、「ある」様式でのテレビ社会とは具体的には何んだというのだろうか？その問題を解く鍵として、フロムは次のように言う。「『ある』様式には、その前提条件として、独立、自由、批判的理性の存在がある。その基本的特徴は能動的であるということだが、(中略)それは自分の人間的な力を生産的に使用するという内面的能動性の意味である。」(傍点筆者)と、なるほど今までのテレビ社会は、一方的な送り手と一方的な受け手との片務的役割をそれぞれが担ってきたに過ぎない。マス・コミュニケーションの最も主要な媒体の一つであるテレビが、これ程までに一方向的であったことに気づかなかつたのはどうかであった。送り手＝能動者、受け手＝受動者としての分業が、すなわち「持つ」様式のテレビ社会の特徴であったとすれば、「ある」様式においては、まずこの分業制を打ち破ることであり、人々が独立、自由、批判的理性の持ち主として、能動的にテレビ社会にコミットし、自己の力を生産的に使用することだということになるであろう。ニューメディアと言うメディアとは媒介を意味し、生活環境を含意する。それゆえ「ある」べきテレビ社会は、「持つ」ことによる幸福という文明の幻影の享樂から自己を解放し、新たな生の質を問いなおし、人々が相互に能動的に働きかけ、自己を実現する、……その事の可能性を促進し、推進する培養池のなければならぬ。そのような重大な役割を果すものとして、テレビ社会は変革されていかなければならぬ。それは、ただ単にテレビの生き残る道であるばかりでなく、「ある」べき様式によって、充実した生を生きたいとする人々の、平和な生の革命への導き手としての、「ある」べきテレビの基本的「あり」方にほかならぬ。

それでは、「あるべき」テレビ社会は、どのように具体的実現されていくのだろうか。節を改めてそのことを考えてみよう。

4. 能動的テレビ

現在のテレビをみると、そこには二つの主要な特徴があるように思われる。その第1は、すでに述べたように送り手から受け手の側への一方的な流れ、すなわち「一方向化」があること。第2に、特定な地域からのみ、一方向的にテレビネットワークを通じて地方に放映されるような、著しい「中央集権化」の中にあることが挙げられる。

先ず第1の「一方向化」について見てみよう。現在のテレビ放送は、難視聴地域での共同受信や一部の地域で試みられているCATV方式を除くと、ほとんど全てが無線放送方式である。そのため、送り手は一方的に放送を送り続ける結果、第1に放送する内容に、受け手の参加はまず皆無に近い。第2に放送時間が決められていて、受け手はその時間に合わせて視聴する以外には、たとえ録画装置をもっている場合でも、方法がない。すなわち「一方向

化」の結果、テレビ放送は、若干の例外を除けば、受け手の都合によるのではなく送り手のほとんど一方的都合によってなされていると言うことができよう。その結果、受け手側からみて第1に得たいと思っている情報だけを選択的に得ること、第2に得たい時刻に情報を得ること、などはもちろんのこと、第3に受け手が情報を送出すること、などは全く不可能な状態にある。このような強い制限こそ、現在のテレビの持つ機能の特徴であり、受け手の「専門化」を計り、一方的に受動的な地位に押しやっているものである。

次に「中央集権化」についてみてみよう。現在の放送におけるプログラムの送出は、東京、あるいは一部大阪からなされており、そこにあるキー・ステーションで、企画・制作された番組がストレイトに全国に放映されている場合がほとんどである。また、これらキー・ステーションは、企業としても「巨大化」し、情報源の著しい「集中化」が発生してきた。このため、テレビ放送網は、少数でかつ巨大なものとなってきた。それによって、地方にあっても、都会風の文明情報を間のあたりに見ることができ、大きな資金を投入して、大規模な企画のプログラムが作られるようになり、知識の全国的な平準化、同時化に寄与するといったプラスの面があるが、その反面、種々の弊害を生みだしている。すなわち、その短所として第1に文化の「画一化」が挙げられる。価値感の画一化は流れ作業の量産システムを基本とする社会では積極的な意義を有したに違いないが、その結果連綿として伝えられてきた地方の文化、習慣、価値感等々は、破壊の憂き目にあい、衣、食、住の生活の基本的スタイルまでが全国的規模で規格化される破目にもなってしまった。このようなことの原因として、テレビに全て責を負わすのは極論であるとしても、そこで果たしたテレビの役割は少なからぬものがあったと言えよう。また第2に、「巨大化」の中では常に放送の対象となるものが、不特定の多数となることによって、平均的、類型的な放送がなされる傾向が生じ、独創的、新奇的なものは除かれかねない。またマスコミが一部の政治組織や一部の論理などによって操作される危険も将来においては考えなければならなくなってきた。

以上みてきた現代のテレビの基本的な様式は、つづめて個々の視聴者の立場から言えば、「受動的」であるということにほかならない。それでは、そのことが、テレビの基本的な限界であるかと言えば、そうではない。テレビは、この「受動性」と、コインの反面としての「能動性」をも本来的に持っているのである。それを実現する有効な手段はやはりCATVが有力なものとなるであろう。現在すでに確立されつつある技術、とりわけ光ファイバ伝送路、放送用各種宅内設備、種々の画像記憶装置、ソフトウェアを含むデジタル機器、等々は、「能動的」テレビ・システムを確立するには十分な段階にきていると言うことができる。そこで、かれらの機器を設置されたCATV局が各地域、例えば市区町村

の範囲をエリアとして設立され、運用されるようになるであろう。この場合加入は原則として任意性である。ここでは、加入者がスイッチを投入することによって、一方的に映像が押しかけて来るようなことはない。すなわちまず初めに、CATV加入者が、自分の受像機に内蔵されているキーボードによって、欲しいプログラムをキーワードによって検索するところから始まる。CATV局は、これによって局が所蔵するプログラム名を出力し、加入者に知らせる。加入者は、それらの中から適当とするもののアブストラクトを要求し、それによって最も得たいと思われるプログラムを選択する。こうして選ばれた

プログラムは、加入者の受像機の内蔵または外部記憶装置に瞬時に伝送される。すなわちCATV局の機能は、この限りで言えば、現在の図書館と類似の役割を果たすことになる。一般的にはペイテレビとして運用され、これがCATV局の主要な運用資金となるが、スポンサーのあるプログラムについては無料の扱いもあってよい。加入しているCATV局にないプログラムは、他のCATV局との間で融通し合うことも可能である。

また、加入者の中で、自己のもつ情報を他に伝えたいと考えるときには、個人またはグループによって、番組を企画したり、または制作したりすることも可能となる。CATV局は、その技術的援助・助言のためのスタッフを常駐させるか、またはその種の企業に発注するなどの援助を行なえるような組織になっている。

このようにして、加入者一人一人が、主体的に見たい映像を、見たい時刻に見ることができ、また自らも他の人々に対して知らせたい情報を送信することができるようになるのである。CATV局で所蔵すべきソフトの選択、企画、制作、またその運営組織などは、加入者からなる委員会を通じて、加入者の積極的、能動的参加の下に民主的に運営されることは言うまでもない。またこれによって、過度の「集中化」や「画一化」、「中央集権化」されたシステムを脱し、「分散的」で、「独創的」な文化が育まれるメディアが創り出されるようになるであろう。

5. テレビ社会の限りなき地平

前掲の書の中でフロムは、今後の(技術の)目的は自然に対する支配ではなく、技術に対する支配であり、(中略)非合理的な社会の力や慣習に対する支配である。」(カッコ内筆者)と述べている。現代は情報社会だという。また情報過多の時代だともいう。その中であって、ややもすると人々はアイデンティティを見失なう。一方的に押し寄せる情報洪水の中で、右往左往する多くの人々がいる。テレビをとりまき技術革新は、それが真に社会のインフラストラクチャーとして、健全な情報社会の建設に向けられるのでなくてはならない。

つまり、人々が、個々人にとって真実必要とする情報を求めて、それによって自己を確立する、そのためにこそテレビは寄与するものでなくてはならない。21世紀のテレビは、その卓越した力をもって、自立した人間の支配に忠実に従属する、暖かく、やさしく、素直で美しいテレビであって、いささかも人間を支配するどす黒い野心を持つテレビではない。

またフロムは、「ある」様式の社会形成が生まれるためには、多くの企画、モデル、研究、実験によって、必要なことと可能なこととの間の隔たりに橋を渡すことを始めなければならない。」とも述べている。この一世代のわれわれのテレビ社会は目ざましい発展を遂げてきた。苦役、貧困、非科学的因襲、情報の一部の人々による特権的独占、等々の打破に、テレビの果たした役割は実に筆舌に尽し難く大きい。その巨大な力は、次につづくジェネレーションにおいても、ひきつづき人類の平和な久遠の地平へと人々を導き、援助するものでなければならない。今日の技術革新はその可能性へと渡るかけ橋である。それは、つづめて言えば、「持つ」テレビから、「ある」べきテレビへの変身である。そして「ある」べきテレビこそが、自己の生を充実して生きることを熱望する人々の、自己実現のために、「持つ」様式から「ある」様式への人類社会の変革のための導き手となるであろう。その名誉ある義務を果たすところにこそ、限りなきテレビの地平が見はるかされるのである。

